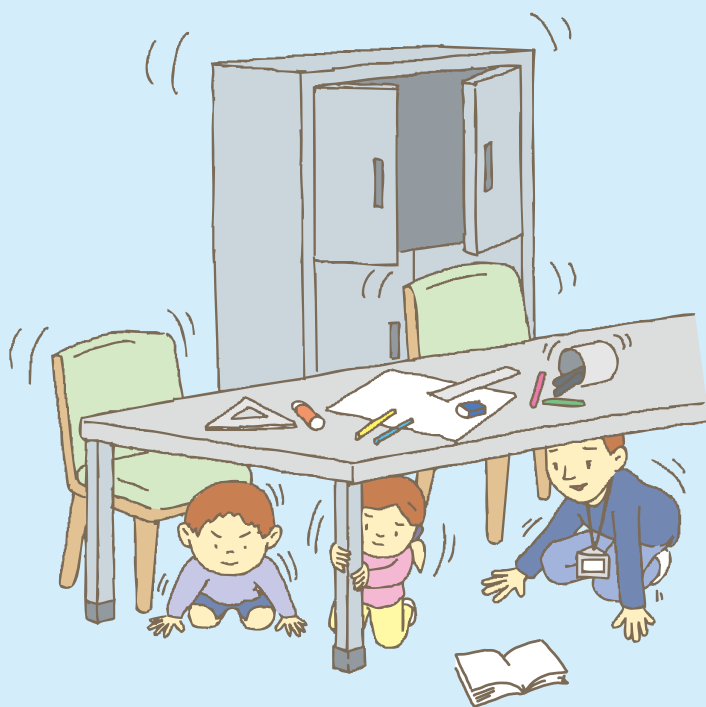
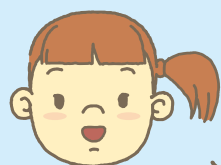


非常時における児童館 とりくみハンドブック



～ 感染症・自然災害時の対応を考える～



目次

はじめに	01
ハンドブックの構成解説	02-04
基本的な考え方	05-06
モデル事業の概要	07
事例紹介	
北海道札幌市	08-11
東京都江戸川区	12-15
愛知県北名古屋市	16-19
新潟県燕市	20-23
沖縄県那覇市	24-27
基本的な考え方	28-30
モデル事業の概要	31
事例紹介	
宮城県仙台市	32-35
兵庫県神戸市	36-39
愛媛県松山市・西予市	40-43
真備児童館(ヒアリング)	44-46
参考資料、事業概要	47-49

【感染症対策編】

【自然災害対応編】

はじめに

児童福祉施設である児童館は、子どもたちの安全・安心な居場所となることが期待されています。それは、自然災害の発生時や感染症の感染拡大の状況下においても変わることがないと考えています。特に今なお続く新型コロナウイルス感染症の感染の広がりは、子どもたちや子育て家庭の生活に大きな影響をもたらしています。そのような中、日々の感染症予防対策の実践により、児童館を利用する子どもたちのいのちと暮らしを守り続けていることにつきましては、大変なご苦労があったかと思われます。この場をお借りして、児童館の運営に関わる職員の皆様に敬意を表します。

さて、自然災害や感染症の感染拡大等により、児童館の通常活動を継続することが難しい状況を「非常時」と定義し、そのような状況においても児童館が安全・安心な居場所となるためには、どのような「とりくみ」が必要かを、全国の児童館の協力を得て、実証研究を行い、今後の児童館活動の参考となる検証ができたと考えております。

本冊子は、これらの調査研究の成果をもとに制作したものです。各自治体、各児童館等において参考にさせていただき、いついかなる時も地域における子どもたちのための居場所としての機能を発揮していくことの一助となれば幸いです。

令和4年3月
厚生労働省子ども家庭局子育て支援課
課長 鈴木健吾

ハンドブックの構成解説

新型コロナウイルス感染症の流行はとどまることなく、各地の児童館運営にも大きな影響を与えています。また、近年、日本各地で自然災害が発生しており、災害の頻発化、激甚化などが指摘されています。

このような、感染症の流行や自然災害の被害によって、児童館では、日常的な活動を継続することができず、開館時間の短縮、活動の縮小、場合によっては休館などの対応を迫られることとなります。

このハンドブックでは、このような日常的な活動の継続が困難な状態を「非常時」と位置づけ、その際の児童館活動について、考え方や具体的に参考となる事例などを紹介します。

厚生労働省では、新型コロナウイルス感染症の流行下における児童館の実態を把握するとともに、児童館の取組をまとめた「新型コロナウイルス感染症対応からの気づき～児童館における実践事例・データ集【令和2年度版】～(※)」を調査研究を通じて発行しました。この調査では、感染症の流行によって、もともとあった児童館の機能は制限され、流行前の状態に回復することの困難が分かりました。つまり、非常時においては、子どもの居場所、子育て支援の機能が十分に提供できない可能性があると言えるわけです。

感染症の流行による健康や経済活動への影響、自然災害の被害(家屋、ライフラインへの影響など)は、目に見えてわかる現象だけではありません。日常的な生活が制約されることにより、大人よりも脆弱性の高い、子どもの心身への影響も大きいと言えます。

どのような状況においても、子どもの心身が守られ、健やかに暮らしていくことを保障するためには、児童館の果たす役割は大きいと言えるのではないのでしょうか。

では、児童館においてどのような活動が求められるのでしょうか。

感染症の流行や自然災害を防ぐには限界がありますが、リスクを正しく理解することが重要です。そして、児童館の置かれている状況から、子どもたちのためにできることを、可能な限り継続的に提供していくことを見出すことがかせません。

このハンドブックでは、記載されている内容をヒントに、各児童館において、子どもたちのために提供できる機能や事業を考えていただくことを目的に作成しています。具体的には、「感染症対策編」と「自然災害対応編」それぞれにおける非常時の児童館活動について、基本的な考え方と、関連する取組事例をまとめました。

(※)https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/kosodate/houkago/jidoukan_covid.html

●基本的な考え方

まず、感染症対策編、自然災害対応編それぞれにおいて、基本的に理解しておくべき事項や対策・対応に関する基本的な考え方をまとめています。各児童館の置かれている状況と照らし合わせて確認してもらいたい情報です。

●事例

令和3年度に、感染症対策、自然災害対応のテーマについて、地域バランスや取組内容、対象などを踏まえて、8つの児童館にてモデル事業を実施し、その内容をまとめています。加えて、平成30年7月豪雨において被災した子どもたちの支援に関わった岡山県倉敷市内の児童館職員を対象にしたヒアリング結果も掲載しています。



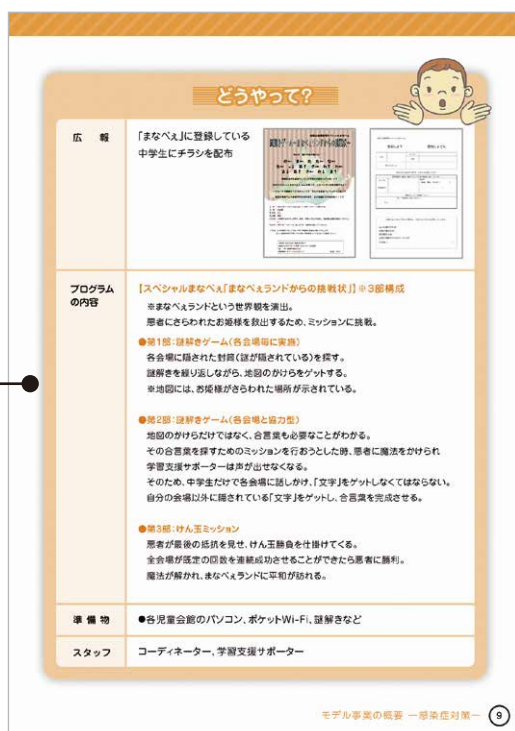
モデル事業のプログラム名や、概要などを紹介しています。

【どうやって】

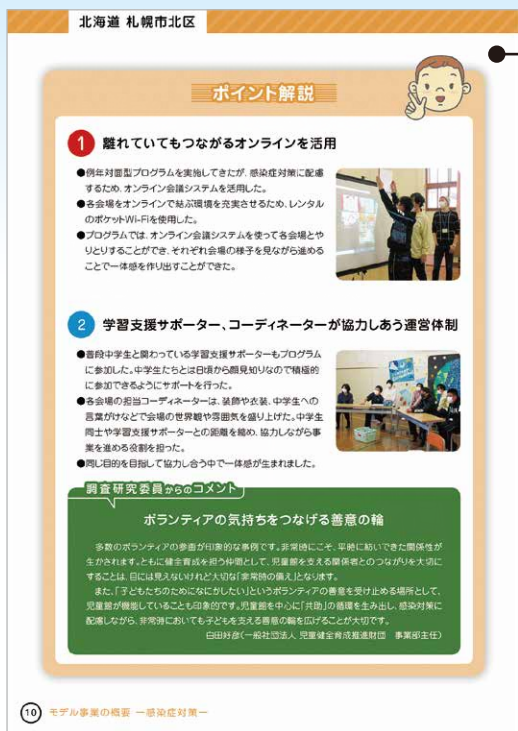
プログラムを実施するために必要な情報をまとめています。

広報、プログラムの内容、備品、体制(スタッフ)など、実際に準備した内容を参考にしています。

児童館で同じように取り組む場合に参考にしたり、アレンジして実施することもできるでしょう。



ハンドブックの構成解説(続き)



【ポイント解説】

プログラム実施にあたって、企画や当日運営、ふりかえりの情報をもとに、参考となるポイントをまとめています。

モデル事業を実施した児童館の特色やこれまでの背景、プログラムを実施するにあたって留意すべきことなどを掲載しています。

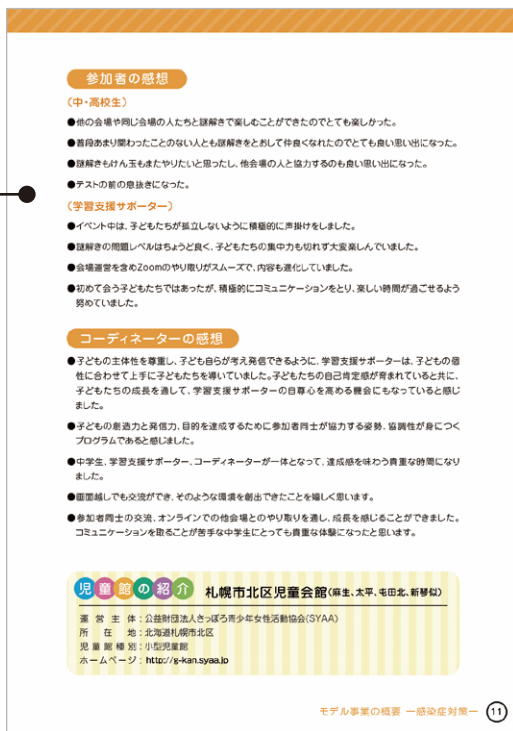
また、調査研究委員(専門家・児童館職員)からの事例に対するメッセージを提供いただいています。

【参加者・職員の声】

モデル事業のプログラムに参加した利用者の声や職員等の感想や意見などをまとめています。

プログラムの効果や実施する上での留意点などとして理解するとよいでしょう。

(※)子どもたちを対象にした遊びのプログラムは上記のような記載となっていますが、保護者などを対象にした相談対応やヒアリング結果は、掲載内容が上記と違ってきます。ご了承ください。



●子どもたちを取り巻く様々な感染症

新型コロナウイルス感染症以外にも、代表的なところでは、季節性のインフルエンザは、例年12月～3月が流行シーズンとなるほか、おたふくかぜ（流行性耳下腺炎）、ノロウイルスやロタウイルスによって引き起こされる急性の胃腸炎、手足口病、風疹、麻疹などがあります。時として抗原性が大きく異なるインフルエンザウイルス（新型インフルエンザ）が現れることもあります。

集団生活をはじめ前の子どもは感染症に対する抵抗力が弱く、集団での生活・活動によって様々な病原体にさらされ、病気にかかりやすくなります。児童館も集団での生活・活動の場であることから、感染のリスクが高まりやすいと言えます。

●基本的な予防方法

子どもがかかりやすい感染症には流行しやすい季節があります。予防接種の有無にも関係するため、流行する季節に差し掛かったら、予防対策が大切です。

基本的に、有効な予防方法は、手洗いの徹底、マスクの使用、適度な湿度の保持、規則正しい生活を心がける、人混みや繁華街への外出を控えるなどが挙げられます。

(参考)

厚生労働省 感染症情報

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/

厚生労働省 インフルエンザ(総合ページ)

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/infulenza/

●感染状況に応じた対応

病気にかかりやすい、広がりやすいことから、児童館では利用を制限することが考えられますが、子どもたちの生活に制限がかかることで、心身へのストレスがかかることとなります。また、感染症の大規模な流行は、日常的な暮らしや経済活動にも大きな制限がかかることで、子育て家庭にも影響を及ぼします。

児童館は、「子どもの心身の健やかな成長、発達及びその自立が図られることを地域社会の中で具現化する児童福祉施設」であり、子どもが、その置かれている環境や状況に関わりなく、自由に来館して過ごすことができると謳われています。もちろん、感染状況によって、利用制限等をしなければならない状況がありますが、感染を回避しながらできることや、感染対策を講じてできることがあるのではないのでしょうか。

(参考)

児童館ガイドライン

<https://www.mhlw.go.jp/content/HP.pdf>

●感染症流行下での児童館活動

令和2年度に実施したアンケート調査からは、緊急事態宣言の発令は児童館の運営に大きな影響をあたえることになり、職員の戸惑いも見られたほか、「やりたかったけど、できなかったこと」も明らかになりました。その後、各児童館では感染症対策も徐々に浸透する中で、感染リスクを抑えながら、子どもたちの遊びをつくりだすことに苦労を重ねていることと思います。

本研究では、全国5つの地域において、感染症対策をテーマとしたモデル事業を実施しました。そのうち3つの児童館(札幌市北区、東京都江戸川区、愛知県北名古屋市)を対象に感染症対策を講じた上での遊びのプログラムを実施し、ほか2つの児童館(新潟県燕市・沖縄県那覇市)では、子どもや子育て家庭への相談対応を実施しました。

●大事にすべきポイント

これら5つの事例の中で特に大事にしているポイントを整理して、紹介します。

①感染症対策を具体的に検討

感染症対策はどの児童館でも同じように実施されているとは思いますが、周知の仕方や具体的な対応には違いもあるでしょう。これらの児童館では、それぞれ自治体から示された方針等にあわせて、工夫しながら対応しています。想定している場面ごとに、具体的に避けるべきこと、子どもたち一人ひとりに取り組んでもらうことなどを検討していました。

②感染症対策のルールを子どもたちに理解してもらう

感染症対策を示すだけでなく、子どもたちに理解してもらうための工夫も見られました。ルールなどを貼り出すだけでなく、日常から職員が周知しており、あわせて遊びのプログラムの実施前や途中の段階で、適宜職員が説明していました。ルールを決めて説明するだけでなく、子どもたちの意見を反映した例も見られました。

③子どもたちの声を丁寧に聞く

感染症が拡大する中、子どもたちは自由に遊ぶことが制限されたり、家庭環境にも変化が生じています。子どもの心身への影響も見られるようになったかもしれません。子どもたちを迎え入れる場面、子どもたちと一緒に遊ぶ場面だけでなく、家庭や児童館外での様子など、子どもの様子を伺うことが大切です。あわせて、様々な場面で子どもの声に耳を澄ます、安心して話ができる場をつくるということが大切です。

④子どもや子育て家庭の置かれている状況を丁寧に理解する

感染症の拡大が与える子どもや子育て家庭への影響は個別性があります。必要に応じて出向いたり、相談を受ける機会をつくり、丁寧に状況を理解していくことが大切です。把握した情報から、子どもや子育て家庭が置かれている状況を見立てて、そこから具体的な対応を考えていくことが期待されます。児童館だけで抱えこまず、必要に応じて、学校や自治体の担当部署、子育て支援の関係機関などと情報を共有し、相談することも必要です。

モデル事業の概要【感染症対策編】

モデル事業の実施にあたっては、本事業の調査研究委員会委員からの助言をもとに、5つの地域で実施しました。

モデル事業の実施にあたって、新型コロナウイルス感染症の流行は地域によって違いもあることから、都市部（政令指定都市、特別区）と地方都市からそれぞれ選出するようにしました。

また、感染症対策を講じた遊びのプログラム実施と、子ども・子育て世帯向けの支援プログラムの2つの種類を実施しました。遊びのプログラムは、対象の年齢層の違いも意識して検討しました。

感染症対策を講じた遊びのプログラム

都道府県 市区町村	児童館名	事業名・プログラム概要
北海道札幌市 ※都市部	麻生児童会館 ほか 北区内4館	【北区6会場合同スペシャルまなべえ「謎解きゲーム～まなべえランドからの挑戦状～」】 学習支援をしている中学生を対象にしたゲーム企画
東京都江戸川区 ※都市部	共育プラザ小岩	【eスポーツ交流会～オンラインで7児童館対決～】 中高生を対象にしたeスポーツ大会。中高生有志が大会の企画にも関わる。
愛知県 北名古屋市 ※地方都市	熊之庄児童館	【くまじ大運動会】 小学生の企画アイデアをもとに実施する感染症対策に配慮した冬の運動会

子ども・子育て世帯向けの支援プログラム

都道府県 市区町村	児童館名	プログラム概要
新潟県燕市 ※地方都市	小中川児童館、 児童研修館 「こどもの森」	【「子育てコンシェルジュ」による相談対応】 国が定める子育て支援員研修を修了した児童館職員によるオンライン無料子ども・子育て相談などの対応
沖縄県那覇市 ※地方都市	国場児童館	【じっくり寄り添いながらすすめる子育て家庭の支援】 児童館利用者向けに食材等の提供・貧困世帯等の相談対応等

北区6会場合合同スペシャルまなべえ 「謎解きゲーム～まなべえランドからの 挑戦状～」

こんな事業

札幌市北区にある6つの児童会館等(麻生①②・太平・屯田北・新琴似・男女共同参画センター)を会場とし、「まなべえ(札幌まなびのサポート事業)」※に登録している中学生や学習支援サポーター、コーディネーターが感染症対策に配慮するため、オンライン会議システム(Zoom)を活用した謎解きイベントを実施しました。

当日は、中学生25名、学習支援サポーター(大学生有償ボランティア)20名が参加し、コーディネーター(職員)16名が携わる、合計61名での事業となりました。

事業は3部構成で、第1部では会場ごとに謎解きをし、第2部では他会場と協力して合言葉を探し出し、第3部ではミッションにチャレンジしました。

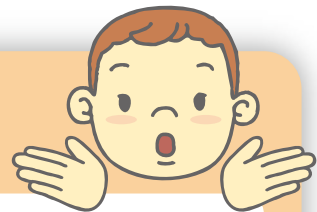
第1部では、カメラの前で謎解きの答えを発表する際、恥ずかしそうな様子を見せていた中学生でしたが、徐々に中学生が自ら他会場に声をかけあい自発的に発言し交流を図っていました。第3部のけん玉チャレンジでは、うまくいかない会場を他の会場が助けるなど、様々な体験を通し、会場の枠を超え交流を深めました。



※「まなべえ(札幌まなびのサポート事業)」とは？

学習に不安を抱える中学生を対象に、各区に学習教室を開設し、大学生ボランティア等の支援により学習習慣の定着を図るとともに、子どもが安心して過ごすことのできる居場所を提供することを目的とした札幌市の事業。

どうやって?



広 報

「まなべえ」に登録している
中学生にチラシを配布



参加します		参加しません	
名前	ふりがな	名前	
まなべえID			
参加する方は以下の内容を、必ずお読みください			
ふりがな	学年	性別	その他 ()
保護者氏名	保護者 (職業・その他) ()		
参加しなくてもご参加ください			
なし	参加しなくてもご参加ください		
参加しない方は以下の内容に、必ずお読みください			
<ul style="list-style-type: none"> ・本人とご一緒のため ・参加行事のため ・保護者のため ・企画に関係がなかったため ・その他 () 			

プログラムの 内容

【スペシャルまなべえ「まなべえランドからの挑戦状」】※3部構成

※まなべえランドという世界観を演出。
悪者にさらわれたお姫様を救出するため、ミッションに挑戦。

●第1部：謎解きゲーム(各会場毎に実施)

各会場に隠された封筒(謎が隠されている)を探す。
謎解きを繰り返しながら、地図のかけらをゲットする。
※地図には、お姫様がさらわれた場所が示されている。

●第2部：謎解きゲーム(各会場と協力型)

地図のかけらだけではなく、合言葉も必要なことがわかる。
その合言葉を探すためのミッションを行おうとした時、悪者に魔法をかけられ
学習支援サポーターは声が出せなくなる。
そのため、中学生だけで各会場に話しかけ、「文字」をゲットしなくてはならない。
自分の会場以外に隠されている「文字」をゲットし、合言葉を完成させる。

●第3部：けん玉ミッション

悪者が最後の抵抗を見せ、けん玉勝負を仕掛けてくる。
全会場が既定の回数を連続成功させることができたなら悪者に勝利。
魔法が解かれ、まなべえランドに平和が訪れる。

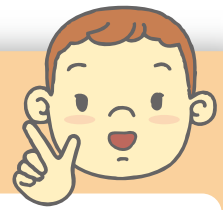
準備物

●各児童会館のパソコン、ポケットWi-Fi、謎解きなど

スタッフ

コーディネーター、学習支援サポーター

ポイント解説



1 離れていてもつながるオンラインを活用

- 例年対面型プログラムを実施してきたが、感染症対策に配慮するため、オンライン会議システムを活用した。
- 各会場をオンラインで結ぶ環境を充実させるため、レンタルのポケットWi-Fiを使用した。
- プログラムでは、オンライン会議システムを使って各会場とやりとりすることができ、それぞれ会場の様子を見ながら進めることで一体感を作り出すことができた。



2 学習支援サポーター、コーディネーターが協力しあう運営体制

- 普段中学生と関わっている学習支援サポーターもプログラムに参加した。中学生たちとは日頃から顔見知りなので積極的に参加できるようにサポートを行った。
- 各会場の担当コーディネーターは、装飾や衣装、中学生への言葉かけなどで会場の世界観や雰囲気盛り上げた。中学生同士や学習支援サポーターとの距離を縮め、協力しながら事業を進める役割を担った。
- 同じ目的を目指して協力し合う中で一体感が生まれました。



調査研究委員からのコメント

ボランティアの気持ちをつなげる善意の輪

多数のボランティアの参画が印象的な事例です。非常時にこそ、平時に紡いできた関係性が生かされます。ともに健全育成を担う仲間として、児童館を支える関係者とのつながりを大切にすることは、目には見えないけれど大切な「非常時の備え」となります。

また、「子どもたちのためになにかしたい」というボランティアの善意を受け止める場所として、児童館が機能していることも印象的です。児童館を中心に「共助」の循環を生み出し、感染対策に配慮しながら、非常時においても子どもを支える善意の輪を広げることが大切です。

白田好彦(一般社団法人 児童健全育成推進財団 事業部主任)

参加者の感想

(中・高校生)

- 他の会場や同じ会場の人たちと謎解きで楽しむことができたのでとても楽しかった。
- 普段あまり関わったことのない人とも謎解きをとおして仲良くなれたのでとても良い思い出になった。
- 謎解きもけん玉もまたやりたいと思ったし、他会場の人と協力するのも良い思い出になった。
- テストの前の息抜きになった。

(学習支援サポーター)

- イベント中は、子どもたちが孤立しないように積極的に声掛けをしました。
- 謎解きの問題レベルはちょうど良く、子どもたちの集中力も切れず大変楽しんでいました。
- 会場運営を含めZoomのやり取りがスムーズで、内容も進化していました。
- 初めて会う子どもたちではあったが、積極的にコミュニケーションをとり、楽しい時間が過ごせるよう努めていました。

コーディネーターの感想

- 子どもの主体性を尊重し、子ども自らが考え発信できるように、学習支援サポーターは、子どもの個性に合わせて上手に子どもたちを導いていました。子どもたちの自己肯定感が育まれていると共に、子どもたちの成長を通して、学習支援サポーターの自尊心を高める機会にもなっていると感じました。
- 子どもの創造力と発信力、目的を達成するために参加者同士が協力する姿勢、協調性が身につくプログラムであると感じました。
- 中学生、学習支援サポーター、コーディネーターが一体となって、達成感を味わう貴重な時間になりました。
- 画面越しでも交流ができ、そのような環境を創出できたことを嬉しく思います。
- 参加者同士の交流、オンラインでの他会場とのやり取りを通し、成長を感じることができました。コミュニケーションを取ることが苦手な中学生にとっても貴重な体験になったと思います。

児童館の紹介

札幌市北区児童会館(麻生、太平、屯田北、新琴似)

運営主体：公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会(SYAA)

所在地：北海道札幌市北区

児童館種別：小型児童館

ホームページ：<http://g-kan.syaa.jp>

eスポーツ交流会 ～オンラインで7児童館対決～

こんな事業

中高生による「eスポーツを通じた他館との交流イベント」で、7つの共育プラザをオンラインでつなぎ、SNSでコミュニケーションを取りながらeスポーツ(ゲーム)大会をおこないました。

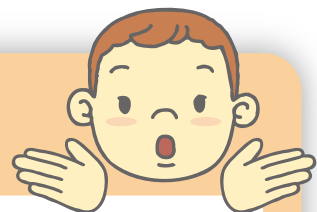
年齢や国籍、障害の有無にかかわらず交流できるeスポーツは、中高生の地域・世代間交流を促進し、地域の一員としての自覚づくりと共生社会の実現を図ることができると考え、年間を通して「eスポーツ実行委員会」が中心になって、活動しています。施設にはパソコンやゲーム機などeスポーツに必要な機材を揃えています。



※「共育プラザ」とは？

江戸川区内に7館ある、中高生世代の支援・子育て支援・世代間の交流支援を行う児童館です。ダンスやライブなど、自分のペースで好きな活動をしたり、勉強をしたりすることができる施設です。不登校等児童を対象として、常駐するユースソーシャルワーカー、ユースカウンセラーなどの専門スタッフを中心に一人ひとりをサポートする「ユースサポート登録」制度があります。

どうやって?



広 報

児童館の公式Twitterで配信、
ポスター掲示



プログラム の内容

●全体のルール解説

各共育プラザのチーム制でトーナメント形式で実施。

制限時間、アイテムの使用等の細かなルールは子どもたちが検討し、事前にオンライン会議システムなどを使い、調整を行った。

●中継

7館をオンライン会議システム、ゲームに特化したコミュニケーションツールによりオンラインで繋ぎ、コミュニケーションを取りながら対戦した。イベントの様子は各館へ映像配信し、選手以外の中高生も視聴できるようにした。

協力体制

他の共育プラザ(平井・中央・南篠崎・葛西・南小岩・一之江)の職員

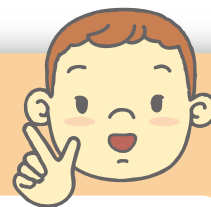
準備物

パソコン、ゲーム機、ゲームソフト、コントローラー、音源用CDデッキ、プロジェクター、スクリーンなど(いずれも元々施設に設置されている)

スタッフ

児童館職員:2名/中高生スタッフ4名

ポイント解説



1 区内7館共通・協力事業の実績

- 以前から10代の挑戦EDOGAWA、江戸川区民まつり、共育ステージ、共育プラザ防災フェスなど、7館の共通・協力事業を実施している。
- これらの企画は対面での実施だったため、ほとんど実施することができなくなったことから、eスポーツ大会を企画することになった。他の児童館の子どもたちと交流する機会になっており、子どもたちも楽しみにしている。



2 中高生の有志が企画運営

- eスポーツ大会の企画から、中高生の有志に参加してもらうようにしている。
- 当日までにゲームの内容やルールなどを検討、当日は進行や中継による実況など、運営自体を中高生が実施するようにしている。7館の子どもたち有志がオンラインで会議を行いながら準備を進めた。
- 子どもたちからの要望にあわせて、職員は、パソコン、プロジェクタの設定など、技術・環境整備をサポートしている。

調査研究委員からのコメント

子どもたちの主体性を形にする

この事業が実現できた背景には、コロナ禍以前から継続して事業を育て、設備投資してきた積み重ねがあります。健全育成を止めないために、日常的に様々な取組を開発し、いざ危機的状況に陥った際にとれる「打ち手(とれる手段)」を増やすことが大切です。

児童館では、「子どもの話し合いの場を計画的に設け、中・高校生世代が中心となり子ども同士の役割分担を支援する」など、自分たちで活動を作り上げることができるように援助することが求められます(児童館ガイドライン第4章)。感染症対策の徹底と子どもの主体的な参画は両方が必要であり、「トレードオフ」ではありません。制限下でも工夫を凝らしながら、子どもの権利を体現する施設として、子どもたちの主体性を形にすることが求められます。

白田好彦(一般財団法人児童健全育成推進財団 事業部主任)

参加者の感想

- 友達に誘われて参加したところ、のめり込んだ。ゲームの実況などはYouTubeを見て研究した。普段は、SNSを使って他の児童館を利用しているメンバーともやりとりしている。
- いまは、みんなでワイワイ楽しく参加してくれるので、とても手応えを感じている。大会を通じて、みんなと出会える共通の話題があるので楽しくできる。
- 黙食、マスク着用、消毒など、自分たちでできる感染症対策も考えている。
- とにかくみんな参加してくれるから、大会が盛り上がるし、自分自身も楽しい。ゲームの面白さは、やってみないとわからないので、ぜひ大人や職員のみなさんにも参加してもらいたい。

職員の感想

- コロナ禍において、児童館での利用者も少ない時期があったが、徐々に参加する子どもが増えてきている。
- これまでは、職員から呼びかけていたが、いまはゲーム大会を実施するとなると、運営に関わることを希望する子どもたちが、すぐに集まるようになった。自発的に大会を実施したいという声も出るようになってきている。

ゲームを通じた子どもたちの交流

共育プラザ内でゲームができるようになるには苦労もありました。子どもたちからのリクエストを踏まえて、他地域の児童館などの動向を調べて、平成27年度からできるようになりました。共育プラザでは、子ども主体で進められるように、環境整備を進めています。

児童館ガイドラインには「中・高校生世代は、話し相手や仲間を求め、自分の居場所として児童館を利用するなどの思春期の発達特性をよく理解し、自主性を尊重し、社会性を育むように援助すること。」(子どもの居場所の提供)と記載があります。

いまの子どもたちにとってゲームは、話し相手や仲間を求めるためのコミュニケーションツールとなっています。また、自主性を尊重する形で「eスポーツ実行委員会」などもつくられ、代々後輩の子どもたちが引き継ぐ形になっています。

児童館の紹介

共育プラザ小岩

運営主体：江戸川区

職員数：13名

所在地：東京都江戸川区北小岩2-14-17

利用者数：100名(1日あたり)

児童館種別：大型児童センター

ホームページ：https://www.city.edogawa.tokyo.jp/kyoiku_plaza/plaza_koiwa/index.html

Twitter：https://twitter.com/kyopla_koiwa

Instagram：<https://www.instagram.com/kyoplakoiwa>

くまじ大運動会

こんな事業

熊之庄児童館では、どのような遊びのプログラムをおこなうか、日頃から子どもたちと一緒に話し合いながら実施しています。今回、子どもたちから要望があった運動会を2年ぶりに実施することにしました。

子どもたちから募集した競技種目から5種目を選び、手を使わずに新聞紙を丸めた棒を使ってわっかのバトンを回すリレーなど、感染症対策を組み入れてアレンジを加えた種目をおこない、感染症対策について楽しく理解・徹底できるように工夫しました。

運動会には86人の小学生が参加し、新しいプログラムの開発につながりました。

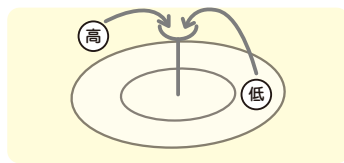
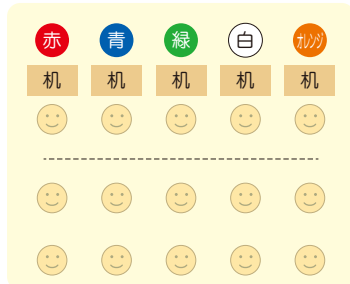




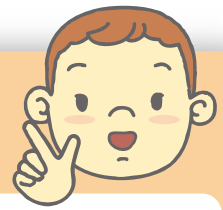
どうやって?



<p>広 報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●児童館だより「くまじだより」に掲載 ●小学生の有志が作成したチラシを館内に掲示
<p>プログラムの内容 (5種目のうち2つを紹介)</p>	<p>【名前でつなげ連想リレー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●競技内容 <ol style="list-style-type: none"> ①職員がお題(例:動物の名前)を言い、そのお題に当てはまるものを紙に書く ②一人一つ書き、書き終わったら鉛筆を持ったまま列の後ろに並ぶ ③制限時間は一つのお題につき5分 ④思いつかない場合は書かずに列の後ろに並ぶ※制限時間内であれば、何周しても良い ⑤5分経ったらチーム担当の職員が一つずつ読み上げる。書いた数が一番多いチームの勝ちとなる ●準備物:鉛筆(人数分)、A4の紙(チーム数分)、机、ストップウォッチ ●子どもに伝える注意事項:鉛筆を持ったまま走らない、待っている間に他の子と相談しない、書き間違えたら、周りに新しく書き直す ●感染症対策:一人一本鉛筆を用いることで物の媒介による接触感染リスクを減らす、待機中、間隔をあけて座ることで、密集を減らす <p>【一球入魂!一球に思いを込めろ!!リレー】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●競技内容 <ol style="list-style-type: none"> ①低学年(1~3年)は内側の円、高学年(4~6年)は外側の円で広がる ②一人2球持つ(赤1点・白2点) ③先生の合図でどちらか一球投げる ④二回目の合図で二球目を投げる ⑤入った玉の数を集計する ●準備物:玉入れ棒、赤白ボール(人数分)、使用したボールを入れるかご、 ※高学年用円→5m、低学年用円→3mを描く。 ●始まる前に子どもに伝える注意事項:二球同時に投げない、マスクは外さない、待機中は座る ●感染症対策:待機中に密にならないように間隔をあけて座る、一度使ったボールは接触感染を防ぐため、再利用しない
<p>準備物</p>	<p>日常的に児童館で使用している物を活用</p>
<p>スタッフ</p>	<p>児童館職員:8名/地域ボランティア:2名</p>



ポイント解説



1 子どもたちの意見を聞き、運動会のプログラムづくり

- 事前に、競技種目を子どもたちに募集したほか、子どもたちの意見を聞き、感染症対策に配慮した競技内容に改変した。
- 子どもから「運動の嫌いな子どもも参加できる競技があるとよい」という意見があり、運動が苦手な子どもも参加できる競技を考え、参加した子どもたちが全員楽しめる種目を職員で調整した。



2 競技種目に、感染症対策を組み入れてアレンジを加えた

- 感染症対策がとれる種目を精査し、競技時間も短時間にしたほか、競技種目ごとに感染症対策のルールを設定した。競技前にルールを伝えた上で、実施するようにした。
- 子どもたちから「ルールを設定するなら、ルールを守った場合に点数をつけて欲しい」との声があり、大声を出さず、気持ちで応援する場合に得点される「マナー点」を当日に導入した。



調査研究委員からのコメント

子どもたちとともに考え、工夫すること

子どもたちに感染症対策を伝えるうえでは、注意すべきことを具体的に、端的に、わかりやすく提示することが大切です。職員がマスクの着用、応援時における声のボリュームなどを、身振り手振りを加えながら、わかりやすく子どもたちに説明していました。子どもたちに合わせて各現場で工夫が求められます。

感染症対策については、どこまで徹底したとしても「ゼロリスク」は難しい現状があります。大切なのは、取り組む職員、そして参加する子どもたちで話し合い、「納得のしどころ」を見出すことです。子どもの最善の利益を保障する児童福祉施設として、子どもを感染症から守りつつ、子どもたちとともに感染を避ける遊び方・過ごし方を考え、工夫することが求められます。

白田好彦(一般財団法人児童健全育成推進財団 事業部主任)

子どもの感想

- 今回の運動会は、いろんな体験ができて、たくさんの思い出ができた。
- 今までの運動会と違って、自分たちの意見が採用されて、競技ができたことはとても良かった。
- 自分たちで考えて、意見を出していくことも楽しいし、自分の意見が選ばされると、なお楽しい。
- これからも、自分たちがアイデアを出し合って、児童館のみんなで楽しむことができたらいいと思う。

職員の感想

- 子ども同士が繋がりを持った運動会を実施できて、楽しかった。
- 競技内容は感染予防に配慮して実施したが、普段の運動や遊びをアレンジしたことで、新たな遊び方を発見できてよかった。
- 久しぶりにイベントを実施したことで、新たな課題、気づきがあり、今後見直したり、感染症対策をした上で、子どもが楽しい場面を大切にしていきたい。

日常的に、話し合いながら遊びのプログラムを実施

児童館では、月1回「じぶんで作ろう会」を開催し、遊び、ルールを決める話し合いの機会を設けて、子どもたちの考える力が育まれるよう働きかけています。そのほかにも、普段から職員と子どもたちで話し合っただけで感染症に配慮した遊びのルールを考えるようにしています。また、行事ごとに、子どもたちの中から実行委員を選出し、行事の企画や運営担当を決めているそうです。

このように、日常的に子どもたちが職員と話し合いながら感染症対策をしていることが下地にあり、イベントでの企画から子どもたちの考えを反映することがスムーズに取り入れられるようになっていきます。

児童館の紹介

くまのしょう 熊之庄児童館

運営主体：特定非営利活動法人 在宅福祉の会 じゃがいも	職員数：4名
所在地：愛知県北名古屋市熊之庄城ノ屋敷2985	利用者数：150名
児童館種別：小型児童館	(1日あたり)
ホームページ： https://www.city.kitanagoya.lg.jp/jidou/1500016.php	

「子育てコンシェルジュ」による 相談対応

こんな取り組み

燕市では、児童館、児童クラブ、子育て支援センターの職員を対象に、国が定める子育て支援員研修(地域子育て支援コース)を実施し、修了者を「子育てコンシェルジュ」として配置しています。

妊娠や出産、子どもの発達など、子育てに関するさまざまな相談・悩みごとの聞き取り役となり、必要に応じて関係機関へつないでいます。

また令和3年9月2日より、コロナ禍でも安心して相談が行えるよう、市内に住む0歳から15歳の子どもの保護者や、子ども本人を対象とした、オンライン相談窓口を開設しました。(オンライン会議システムZoomを活用)

※コンシェルジュによる子育て相談は全施設(8つの児童館、11つの児童クラブ、7つの子育て支援センター)で対応していますが、令和4年3月現在、オンライン相談は一部施設となります。



相談対応 について

相談の方法は、オンライン、電話で受け付けているほか、来館時の対応もしています(※令和4年3月現在)



方 法	内 容・特 徴
オンライン	<ul style="list-style-type: none"> ●相談時間は、水曜日を除く毎日、午後2時30分からと午後3時30分からの2回、1回につき30分程度。 ●市のホームページにあるフォームから申し込み。 ●外出が難しい場合などにオンラインが選ばれている。感染の心配がないので、今後さらに感染拡大すると利用のニーズが高まる可能性がある。 ●話を引き出すのが難しい部分もあるため、テーマを決めてオンラインのおしゃべり会も実施。
電 話	<ul style="list-style-type: none"> ●オンラインでの相談に慣れない人が選んでいるほか、匿名性が高いため、選ばれているように感じている。
来 館	<ul style="list-style-type: none"> ●来館した際にかわす会話から相談に発展することが多い。

相談記録

相談内容は共通のフォーマットで記入し、関係機関に情報共有しています。

記入する情報

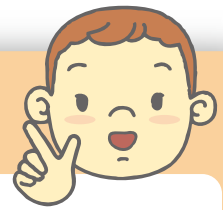
- 日時
- 相談員(対応者)の所属・氏名
- 相談内容(複数選択可):身体・知的/病気/生活・食事/人間関係/
保育園、学校関係/保護者自身/その他
- つないだ関係機関(複数選択可):保健センター/子どもサポート係/その他
- 相談内容
- 相談時間(開始～終了の時間、対応に要した時間記入)
- 相談員の所感
 - ※話を聞いた人が、相談してきた方が、どうなったかを判断し記入しています。
 - ・満足度:とても満足/満足/やや不満足/不満足
 - ・満足度の理由(複数選択可)
 - 提供した情報が参考になった/ならなかった
 - 解決の糸口が見えた/見えない
 - 取組や対応が見つかった/見つからない
 - 困りごとが整理された/されない
 - 話すことで気持ちが楽になった/ならない
 - その他()

相談事案(例)

対応者の所感では、相談の傾向はコロナ禍以前とあまり変わらないようですが、下記のような相談が寄せられています。

相談者	内容	相談の受け方
未就学児の 保護者	離乳食、断乳、こどもの発達(ハイハイ、つかまり立ち)、お出かけスポットなど乳幼児の子育て全般に対する相談	オンライン(他講座の参加者に声かけ、おしゃべり会に発展)
	入園準備、こどもの発育、自身の体調(妊娠中)	オンライン
	夜泣き、子育て中の孤独感	オンライン
祖母	こどもの発育に関する相談(トイレトレーニング)	来館時
未就学児の 父親	母親(妻)が緊急入院してしまい、これから子育てをどうしたらいいか	来館時
子ども本人	いじめに関する相談	来館時

ポイント解説



市全体で子どもを見守るための連携が取れている

- 相談記録は市の担当部署で共有されていることから、担当者が確認して、必要があれば、他の機関につなぐようにしている。緊急性があるなど特に心配な案件は、すぐに市から他の施設に情報共有するようにしている。
- これまでよりも、他の関係機関の状況も見えるようになったことから、連携がとりやすくなった。



調査研究委員からのコメント

子どもを持つ親にとってかけがえのない存在

どの児童館、教育機関でもオンライン環境の活用には難しさがあるように思いますが、少しでもオンライン環境を整えていることを周知することが大事だと思います。

燕市の子育てコンシェルジュのような存在が、身の回りにいたら、子育て世帯にとってはとても助かるでしょう。子どもを持つ親は、悩みがあってもほかの子どもと比べてしまったり、客観的に考えることが難しいことがあります。子育ての専門的な知識や経験を持っている方に相談できたり、親身になってアドバイスしてもらえる機会は貴重であり、相談できることで悩んでいた親も気持ちも軽くなるでしょう。

対人援助の専門的な研修を受けて対応いただけることで、地域の中の児童館や職員の役割がより明確になって、意識して対応していただけることを期待しています。

富川万美(NPO法人ママプラグ理事)

ワンストップ型の子育て支援サービスの重要性

突然の災害により被災をすると、子どもが夜泣きをする、赤ちゃん返りをする、それまでできていたことができなくなる等、いつもとは違う様子がみられることがあります。そうすると、子どもの成長に災害が影響を及ぼしているのかも、と気にしがちです。また、慣れない避難所での生活や、家族宅での避難生活は、対人関係に気がつかうものです。いろいろなことを考えすぎると、不安な気持ちはどんどん大きくなります。

そのような時に、「子育てコンシェルジュ」のような、ワンストップでさまざまな困りごとを相談できるサービスがあると、気軽に相談でき、かつ必要な支援につないでもらうことができ頼りになります。このようなワンストップ型の子育て支援サービスを、平常時だけでなく、災害時にも利用できると、被災した子育てをしている人の生活の支えになると期待しています。

阪本真由美(兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科教授)

小中川児童館職員の感想

- 一人ひとりに応じた対応をすることを心がけており、気になることやトラブルなどがあれば、付箋に書いてすぐに全職員で共有するルールにしています。また、週1回開催する職員会議は議事録をとり、あとから読み返せるようにしています。
- 児童クラブを併設しているため、お迎えに来た保護者と職員とのコミュニケーションの積み重ねも重要と感じています。テレワーク制度の導入により、父親によるお迎えも増えました。
- SNSでのいじめに関する情報を小学校に共有したところ、3年生以上冬休みの宿題で「我が家のメディアルール」を家庭で相談してつくることにつながりました。
- コロナ禍で生活が厳しいなどの家庭状況も見えるので、子どもたちには、せめて児童館では楽しい時間、幸せな時間を過ごしてほしいと思っています。

こどもの森職員の感想

- 広域の子育て支援施設として、様々な地域からの来館があります。「表情がよくないな」というような、気になる来館者は、職員が観察して様子を共有するようにしています。他の児童館などからの情報も参考に应对していることもあります。
- コロナ禍で、経済的に厳しい家庭があることを想定して、参加費がかからないイベントを開催するようにしています。
- 以前、不登校の子どもの対応として、こどもの森への来館を、学校の出席数として扱った事例もあります。2か月ほど来館し、滞在時間と学校と共有して、学校の出席数としてカウントしたものです。児童館としてできる対応を今後も考えたいです。

児童館の紹介

こながわ 小中川児童館

運営主体：燕市
所在地：新潟県燕市小古津新19-1
児童館種別：小型児童館
ホームページ：<https://www.city.tsubame.niigata.jp/soshiki/kyoiku/2/86/841.html>

職員数：11名
利用者数：55名(1日あたり)

こどもの森

運営主体：燕市
所在地：新潟県燕市大曲3355
児童館種別：小型児童館
ホームページ：<https://www.city.tsubame.niigata.jp/soshiki/kyoiku/2/86/687.html>

職員数：5名
利用者数：40名(1日あたり)

じっくり寄り添いながらすすめる 子育て家庭の支援

こんな取り組み

那覇市の南東にある住宅地域にある国場児童館。しつけや日常生活のサポートが必要な子どもが多い傾向にあります。

新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、子どもたちとその家庭にも変化が生じています。そういった子どもたちの様子の変化を察して、日々寄り添いながら、必要に応じて、社会福祉協議会(社協)や地域から提供いただいた食材を届けるなど、丁寧な対応を進めています。



感染症が拡大する中での対応・経緯

令和2年の緊急事態宣言の発令後、児童館利用を制限することになったため、地域の中でも気になる家族を中心に様子を見に行くようにしました。地域の店舗から、弁当提供の申し出があり、職員と話し合い、必要と思われる家族に連絡をして、受け取りの際におしゃべりをしながら渡すなど、話をする機会をつくるようにしました。

多くの家庭は、支援を受けることに抵抗感があるため「うちはそんなに困っていない」と言われたこともありました。そこで、食材提供があったら、子どもの様子を見るために声をかけて、食材を児童館に取りに来てもらうようにしました。

児童館が再開してから、近くに借りた畑を使って子どもたちと食を楽しむ時間を作るようにしました。

食材等の提供について

成長過程で大人や社会から支えられた経験がとぼしいまま大人になった保護者は、苦しい状況でも相談せず耐えてしまい、支援を受けることにハードルを感じて、遠慮してしまいがちです。

そのため、児童館では、職員と保護者との日頃からの関係性を土台に、食の支援というよりは、「おすそわけ」という意識を持って、対応することにしました。

おすそわけの手順

- ①提供した方が良いと考えられる子どもたちのことを職員間で話し合う(所得が減少したことが分かる家庭や多子世帯を中心によく児童館を利用する子ども)
- ②提供した方が良いと考えられる子どもの分は、より少し多めに食材を小分けに準備する。
- ③提供したい子どもたちの他にも必要としている子どもたちがいる可能性があるなので、様子を見ながら「おすそわけ」する(保護者と連絡がとれる場合は直接連絡したり、きょうだいを通じて提供する場合もある)

職員の感想

- おすそわけすると、子どもたちのとても喜んだ顔を見ることができます。そういった様子を見ると、子どもたちは普段から遠慮しているのだと感じます。
- 子どもたちと接する時間をできるだけ多くとるようにして、ゆとりを持って対応できる環境にしています。

●那覇市社協から提供いただいた食材

- ・お米6袋(5キロ3袋、7キロ3袋) ・缶詰42個(シーチキン30個、ポーク12個) ・ホールケーキ6個
- ・麺類13袋(パスタ7袋、5個入りインスタントラーメン6袋) ・レトルト34食(ミートソース13食、カレー15食、みそ汁6袋)
- ・その他(生理用ナプキン8、カロリーメイト20、お好み焼き粉3、黒糖6、ホットケーキミックス2、ゼリー45)

農作業と料理を通じた「団らんの場づくり」

児童館が再開してからは、児童館の庭にハーブを植えたり、児童館の近くに借りている畑で農作業をしたり、収穫した作物を使った料理などを通じて、気軽に子どもたちが楽しめるようにしました。また子ども達の様子を見ながら、児童館の外に遊びに行ったり、ちょっとした企画(工作など)ができるようにしています。

近くの畑では、地域の方に協力してもらいながら作物を育てています。この菜園で収穫した野菜を使って料理をすることもあります。おなかが空いている子どもがいたら「ヒラヤーチー」(沖縄式のお好み焼き)を一緒に作ります。また親の帰りが遅い子どもには、意識して料理の仕方を教えることもあります。

このように一緒に料理を作って食べることを通じて、「団らん」の場になることを意識しているそうです。一緒に作りながら、食べながら話をする中で、子どもたちは家のできごと、悩みなど、いろんな話をしてくれます。そういった話から子どもたちの家庭の様子も分かるようなことがあります。

気になる子どもたちへの対応

職員のみなさんは、子どもたちの負担感を感じさせないような声掛けを意識しているそうです。例えば、洋服をおすそ分けするときにも、「似合いそうだから持って行って」と言葉を添えて渡したり、譲られた洋服を子どもが持って帰った際に、「洋服のおさがりはみんなに声をかけるようにしていて、特別なことではないこと」を説明した手紙を添えるなど、保護者の方が気兼ねなく受け取れるように工夫しているそうです。

子どもの様子から気になることがあれば、「どうしたの?」「気になることがある?」とすぐ聞くようになっています。また状況に応じて、学校や家庭に電話を入れ、協力してサポートするようになっています。

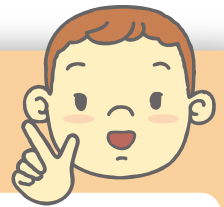
保護者にも気にかけてもらいたいこと、親としての関わり方を考えてもらうようにしながら、「ひとりで悩まないで」といつでも相談してもらえるように心がけています。

職員同士の配慮や工夫

- 日常的な声掛けが習慣化するようにしています。また、児童館閉館後の30分ほど職員が残るようにしており、その時間に、一日の出来事や気になることなどを気軽に共有するようにしています。
- 児童館オリジナルの日誌を作成し、適宜、書き込みができるようにしており、内容を共有しながら、気になる子どもに丁寧な対応ができるようにしています。
- 一人ひとり子どもが抱えていることが違うこともあり、どういう対応がよいのか分からないこともあります。職員ひとりで抱え込むことになると負担も大きいので、職員それぞれの役割を持って関わるようにしています。
- 子どもたちのトラブルや問題が起きたとき、いろんな方向から解決策を考えるようにしています。「正解」はないけれど、こういった態度や行動は「見過ごすことはできない」という感覚を大事にして、職員同士で話し合うようにしています。
- なかなかうまくいかない場合もあるので、そういうときは、「失敗はない、次がある」「ずっと関わり続けていることに意味がある」と言い聞かせて、関わり続けています。
- 専門的な知識や情報が必要な場合もあります。そういったことを意識して、館長は研修や勉強会などの情報を意識的に提供しながら、児童館で何ができるのか考えてもらえるようにしています。
- じっくり子どもたちに寄り添う時間を大切に、気軽に過ごしてもらえるように「まちの保健室」のような役割が担えるようにしたいと考えています。



ポイント解説



日頃から地域や関係機関との協力体制

- 特別の支援と見えないように配慮した一方、普段からの関係機関とのつながりを活かして対応するようにした。
- 日常的に、地域のお祭りや催事には顔を出すようにして、地域の自治会や民生・児童委員、社協、学校などとのコミュニケーションは積極的に行っていた。そのため、社協から、食材提供の申し出につながったり、協力が得やすい関係ができています。
- 地域の人と積極的に繋がりを持ち、子どもたちに姿を見せることで、いろんな人たちが子どもたちの周りにいて気にかけていることを知ってもらえるように意識をしている。

調査研究委員からのコメント

子どもたちとともに考え、工夫すること

「支援を必要としている家庭ほど、助けてといえない。だから、食料やお菓子を「おすそわけ」で受け取ってもらっている」という言葉が印象的でした。国場児童館の活動は、一見なんでもない、日常の活動です。とはいえ、コロナ禍で一層深刻となった家庭の経済状況の悪化に際し、支援を押し付けるものではありません。「親の仕事が減ったんだよ。ゲームも売ったし」という子どものひとことから、「たくさんもらったから」と食料を持っていくような、ひとりひとりの子どもの声からそっと手を差し伸べる試みです。

問題行動を起こす子どもを困った子だと排除するのではなく、問題に直面して困っているのかもしれないと捉えるまなざしは、児童館ガイドラインを具現化するものでありコロナ禍により求められるものです。

安部芳絵(工学院大学 基礎・教養部門 准教授、
厚生労働省社会保障審議会児童部会 放課後児童対策に関する専門委員会
遊びのプログラム等に関する専門委員会 専門委員)

児童館の紹介

こくば 国場児童館

運営主体：一般社団法人 沖縄じんぶん考房
所在地：沖縄県那覇市国場353
児童館種別：小型児童館
ホームページ：<https://kokuba19860501.ti-da.net/>

職員数：8名
利用者数：80名(1日あたり)